

氏 名 喬旦加布

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大甲第 1973 号

学位授与の日付 平成 30 年 3 月 23 日

学位授与の要件 文化科学研究科 地域文化学専攻  
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 中国青海省におけるチベット仏教復興運動下の民間信仰の  
変容に関する人類学的研究  
—同仁県ワォッコル村を事例として—

論文審査委員 主 査 教授 野林 厚志  
准教授 南 真木人  
教授 横山 廣子  
准教授 大川 謙作 日本大学 文理学部  
名誉教授 塚田 誠之 総合研究大学院大学

論文の要旨

Summary (Abstract) of doctoral thesis contents

本稿の目的は、近年、チベットのアムド地域、すなわち青海省一帯で見られるチベット仏教の復興運動と民間信仰の変容を対象とし、青海省黄南藏族自治州同仁県ワオツコル村の事例から、それら宗教にかかわる変化の詳細を明らかにし、その要因を考察することである。この研究目的を達成するために、本稿では、いくつかの文脈に着目する。一つは、中国における経済発展や観光開発、さらに無形文化遺産の登録などの文化政策の変化といった村落社会の外側からもたらされた変化の文脈である。また、一見、それらによって引き起こされたように見えるに村の儀礼実践における変化の根底には、この地域の歴史のなかで変動してきた民族に関わる状況、人々の民族的アイデンティティに関わる意識や感覚という別の文脈がある。本論文では、それらに十分、留意しながら、議論を進める。

序章では、本研究の目的を述べ、先行研究を振り返りながら本研究を位置付け、研究の意義、調査概況と本論文の構成を記している。

第一章では、歴史文献、地域のさまざまな記録や資料、人々の語りを通して、本調査地であるワオツコル村の地域概況に関して記述している。本調査地が、歴史的にチベット族やモンゴル族、漢族、土族、保安族などの先人たちが複雑に接触する交差点であり続けてきたことを明示する。

周辺民族との関係に関して論じた第二章では、チベット人としてのアイデンティティが強く、日常の生活様式においては周辺で生活するチベット族と相違がないにもかかわらず、周辺チベット族から「ドルド」と呼ばれてきた土族の歴史を論じている。1950年代の民族識別工作実施に伴う中国政府からの「土族」という正式認定と、人々自身の帰属意識とのズレを、ワオツコル村を中心に、土族、チベット族、漢族、保安族などの多民族間の歴史的繋がりから論じている。

第三章では、村人の日常生活の実践に着目し、村社会の伝統的社会生活を支える基層部に関して、村の社会構造や経済活動との関わりから論じている。村社会には、アニミズム的民間信仰のマホンカン廟や仏教ニンマ派のンガカン堂、チベット仏教ゲルク派の僧院や仏塔など、宗教的に多様な施設があり、その空間で人々は、それぞれの施設においてふさわしい宗教的実践を繰り返しながら生活している。本章では、現地の村社会における人びとの日常生活における重層的な宗教実践を描写した。

第四章では、1980年代以降の中国政府や地方政府による西部大開発や経済開発、観光開発などにより、ワオツコル村社会が外部社会へと開かれ、外部社会と連動しながら変化していく過程を描いている。特に2000年以降、地方政府や中国政府、ユネスコにより、レブコン芸術が世界遺産として公認されたことで、村社会内部の人々がレブコン芸術をめぐる様々な活動に、積極的に関わろうとしており、それによる人びとの生活実践や価値観の変化を論じている。

第五章では、近年のワオツコル村におけるチベット仏教復興運動の展開とその要因について論じている。チベット仏教の転生ラマや村出身の仏教学者、高僧による訓話の他、新たなボランティア組織の設立、ソーシャルメディアの拡散により、村社会に大きな変化が生じていることを供物や民族衣装、ツェタル儀礼や記念日の具体的内容を通して描き出す。

(別紙様式 2)  
(Separate Form 2)

他地域のチベット人や外部との接触が増える中で、村の人々が「チベット」を強く意識し、儀礼やそれに関する実践が作り変えられていく過程を、チベット仏教復興の一連の運動として分析している。

第六章では、筆者の長年の現地調査を通して収集してきたフィールドデータをもとに、ウォッコル村で最大の年中行事であるルロ祭とフコン祭、また季節の移ろいとともにより日常生活に根差した宗教儀礼であるツェト儀礼やツェゴク儀礼、チュム儀礼、ロサル儀礼、ニャネ儀礼、モンラム儀礼、チャム儀礼、ルサン儀礼などに関して厚い記述を行っている。近年のウォッコル村社会で生じている儀礼の変化に着目し、廟や僧院の増設、チベット民族衣装の変化、生贄や動物の殺生の禁止、廟名の改名など近年の変化を記述し、チベット仏教復興運動下の儀礼変容の諸相を論じている。

これを受けて第七章では、個々人の人生儀礼における変化を誕生儀礼から剃髪儀礼、成人式、結婚式、積徳儀礼、長寿儀礼、葬送儀礼に関して、細部にわたり記述している。近年の儀礼に関わるさまざまな変化は、その実践を通して、儀礼の主体である村人の民族意識の揺らぎと連動し、村内外での議論を伴いながら、さらに村落社会の変化や伝統的に村人が継承してきた文化を変化させる相互作用を見せていることを考察する。

最後の終章では、ウォッコル村におけるチベット仏教の復興運動と民間信仰の変容の全体像を整理するとともに、その要因について考察する。結論として、チベット仏教復興運動の活発化は現地社会の民間信仰の変容と連動しており、土族ではなくチベット族であろうとする「ドルド」の曖昧で可変的な民族的帰属意識が深く関わっていたこと、そして、特にウォッコル村が周辺村落よりも多く輩出してきた高僧や伝統医、大学を出た知識人らの役割が大きいこと、漢族や漢族文化との繋がりやチベット族の村との関係など、地域のミクロな過去の歴史の反映があることを指摘する。

博士論文審査結果の要旨

Summary of the results of the doctoral thesis screening

本論文は、土族ならびにチベット族を主な居住者とする中国青海省の地方村を対象とし、チベット族から歴史的に「ドルド」とよばれ、中国の民族識別政策では土族とされてきた人々の信仰のありかたや儀礼における変化を考察するものである。種々の儀礼や信仰活動、社会組織や経済活動に加えて、地域で伝承されてきたタンカ（宗教画）芸術に関わる変化、突出した仏教学者らをリーダーとするチベット仏教復興運動やそれをめぐるSNSを介した当該村出身者の国際的な議論の展開などの最新の状況を、堅実なフィールド調査を通じて詳細にとらえ、丹念に描いた民族誌的研究である。それらのデータを踏まえ、近年の儀礼における変化の中で、特に当該村で顕著に進展する民間信仰を含めた儀礼全般におけるチベット仏教への傾斜を指摘し、その要因として、歴史的に民族諸集団が錯綜し複雑に関与してきた当該地域における民族アイデンティティの動態、民族間関係の変容、さらには当該村の歴史を論じている。

論文は、研究の目的と問題意識を述べた序章、研究対象に関する民族誌的記述である第1章から第7章、考察と結論が書かれた終章で構成される。

第1章でチベットのアムド地域に属する青海省や当該村の歴史を整理した後、第2章では当該村に関わる民族集団について述べた上で、村人の語りを通して、民族集団の歴史が描写される。第3章と第4章では、村落の伝統的社会組織や寺廟など、宗教実践の場を記述するとともに、経済面での変化に焦点があてられる。近年の経済発展にともない、農業を基盤とする自給自足的な生業形態から商工業やサービス業、漢方薬材（冬虫夏草）の採集などに重点を置く経済構造への変化が見られ、他方、中国政府が進める文化政策のもとでの伝統的な工芸技術の無形文化遺産登録、「芸術の郷」といった地域観光開発が促進されている実態が詳述される。続いて、当該村でのチベット仏教復興運動の高まりの具体的諸側面を第5章で明らかにした後、第6章および第7章は、村に引き継がれてきた人生儀礼、民間信仰に由来する宗教儀礼が、近年のチベット仏教の復興運動と互いに関連し連鎖して変化している状況を明らかにする。そのうえで、終章において、当該村の人々の民族的アイデンティティのありかたが、近年の儀礼や宗教信仰のありかたの変化を促進していると結論づけている。

本論文の優れている点の一つは、近年、一面ではチベット人としてのアイデンティティの強まりが見られる当該村のドルドの民族アイデンティティの揺らぎや多様な現れ方、あるいは変化を、漢族とチベット族という大きな二大勢力の間で、多様かつ複雑な民族間関係を経験してきた歴史の中で捉え、描出したことである。

また、本論文の情報量の豊富さも特筆すべき点である。土族語、チベット語、中国語を駆使して行った参与観察から得られた一次資料を分析の基盤にすえつつ、「方志」に代表される史料、政府関連の公文書、村落に保存されていた儀礼文書等の多岐にわたる文書資料を読み込み、村落の人々、村落の諸実践の関係者が参加する属性の異なる複数のSNSコミュニティの中で展開される議論を丹念に採集、比較検討する等、多様かつ豊富な情報を積み上げることに成功している。

中国における少数民族研究という観点からは、土族研究そのものが手薄であるという状況に鑑みた場合、本研究に示されたデータの新規性と深度が有する意義は大きい。対象と

(別紙様式 3)

(Separate Form 3)

なった青海省を中心とするアムドは、ともにチベットを構成するラサを中心としたウーツァン、四川省西部地域などのカムに比べ、近年、国内外の研究者によるフィールド調査がおこなわれている数少ない地域である。しかし、とりわけ中国外の研究者の長期滞在型のフィールドワークは容易ではない。出願者は、自身が地元の出身である強みを活かし、人々の生活や内面に深くは入りこむ本格的なフィールド調査を行った。自文化研究の人類学者ならではの厚みのある記述を民族誌として昇華させ、チベット文化圏に包摂されつつも、主流のチベット族とは異なる言語文化的特徴やアイデンティティをもち、差別視されることもあったドルドの民族としての葛藤や自己表出、多元的状况を浮き彫りにしたことは、文化人類学におけるチベット研究ならびにエスニシティ研究にも少なからぬ貢献を果たしていると言ってよい。

ただし、本論文に問題点が全くないわけではない。深みのある民族誌的研究ではあるものの、対象は限られた村の事例であり、他の村における実態とのより掘り下げた比較検討、それにもとづく相対化は一部の村の間では試みられているものの、必ずしも十分ではない。また、宗教の変容を論じる上で、出願者はチベット仏教と地域の民間信仰を対極的にとらえた枠組みにおいて、多面的に要因を考察する手法を用いているが、さらに文化人類学における儀礼論や社会関係論の中で展開してきた他の観点からの議論の可能性もある。加えて欧米におけるチベット研究の渉猟に不足しているところがなくはない。これらの点については、出願者が継続的に同地域の調査、研究を進めていくうえでの課題とされたい。

以上のように、いくつかの問題点はあるものの、本論文は中国青海省のドルドの民族アイデンティティの変容を、厚みのある記述かつ多角的な視点をもって浮き彫りにした民族誌的研究として高く評価でき、審査委員会は全員一致で、本論文が博士の学位を授与するに値するものと判断した。